

李登輝、消えゆく

李登輝、この大いなる人物の深い思素、巧まざる行動力、それでいてみずからを誇ることにない、そういう人間に私は氏以外に会ったことがない。「分断社会」を生きる指導者はこれだけのものを内に秘め、そうして外に向け果敢に行動するものなのか、政治とはここまで奥の深いものなのか。李登輝という人物の底知れぬ力を、逝去の報に接し改めて感じざるを得ない。

ある光景のことを鮮やかに思い起こす。一九九五
年二月二十八日、台北新公園で催された二・二八事
件記念碑落成式に臨んだ李登輝は、この事件の犠牲
者とその家族に対し、総統として、何より国民党主
席として公式に謝罪を表明したのである。相克する
党内論争を経て、ここまでいたる努力はいかばか
り辛苦に満ちたものであったのだろうか。この謝罪
なくして台湾の深層を蝕む「省籍矛盾」の解消はあ
り得ない。また、それなくして台湾の政治的民主化
は成り立たないという信念の表明である。これによ
り台湾は「社会統合」への道に入ったのであろう。

渡辺利夫 (拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを歴任。二〇一五年十二月より現職。

もうひとつ、台湾の民主化のためには、中華民国が大陸を含む中国全体の正統政府だという虚構を崩し、台湾の主権の及ぶところを台湾本島ならびに金門、馬祖などの離島に限定し、この中で民主化を實現しようという信念であった。ドイツの公共放送の取材に応じた李登輝は、台湾は「一つの中国」の一部ではない。主権をもつもう一つの政治的実体であることを初めて言語化したのである。

国民党の「台湾化」を避けてはこの国はもたないという危機意識の表明でもあった。「小国寡民」台湾の生存をいかにまっとうするか。ここにいたるまでの思索にはどんな心理的な葛藤があったのか。国民党内で表面化した確執のことは事実としては知っているが、李登輝個人がどういう政治的未來を描こうとしていたのか。その内面を誰か語ってほしい。氏は「中華民国在台湾」といった。その言は受け継がれて蔡英文氏にいたり「中華民国台湾」へと進んだ。「信頼に値する人物に台湾を任せて、先生、静かにお休みください」という民の声が聞こえる。